三菱庭球の歩み

―三菱庭球同好会と三菱養和会との関係史―

2026年4月

三菱庭球同好会

表紙写真：染井コートのクラブハウス（岩崎久彌邸より移転せるもの）

本誌の内容には著作権があります。無断での複製、転載、または商業目的での利用は禁止されております。　2026　三菱庭球同好会

目次

はじめに・・2

１．組織の変遷・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3

２．三菱庭球同好会と三菱養和会との関係年表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4

【エピソード】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7

① 岩崎彦彌太氏と養和会テニスクラブ

② 三菱倶楽部規則

③ 三菱養和会のテニススクール

④ HI 盃・全三菱庭球大会の運営主体

３．養和会テニスクラブトーナメントの戦績・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8

４．染井運動場の配置・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9

５．養和会テニスクラブの写真集・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10

６．養和会テニスクラブ閉鎖時のこと・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12

【参考資料】

① 三菱の庭球・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13

② 三菱庭球部が誕生するまで・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・20

③ 三菱養和会設立に際して、三菱養和会教条・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・22

はじめに

三菱庭球同好会は、1911 年（M44)、丸の内に新設されたコートで活動を開始した「三菱庭球部」をその源流とし、今年で創部 115 年を迎えました。

1914 年（T3）に三菱倶楽部が創設され、三菱庭球部はその一部として統合されました。翌 1915 年（T4）には染井の地（現・巣鴨スポーツセンター）に 400mトラックとテニスコートが完成。以来、染井コートは、戦後 HI 盃復活の前年 1951 年（S26）まで、約 40 年間にわたり三菱テニスプレーヤーの「聖地」となりました。

一方で、三菱倶楽部が 1940 年（S15）に「三菱養和会」へ組織変更された際、染井コートはその管理下となり、1946 年(S21)には「養和会テニスクラブ」が設立されました。大淵鉄太郎氏（地所)、野村義門氏（重工）ら当時の三菱の主力プレーヤーは会員として、同クラブの発展とともに HI 盃の早期復活に心血を注がれました。

1970 年（S45）の三菱創業百年事業の一環として、染井運動場の転活用が行われ、染井コートは閉鎖となり、1973 年（S48）に養和会テニスクラブも幕を閉じました。

三菱のテニス史については、HI 盃復活 10 周年、30 周年、50 周年の各記念誌『三菱庭球の歩み』に記されていますが、染井コートでの三菱養和会のテニス活動については、戦中、戦後の混乱もあり、いわば「空白の歴史」となっていました。

今般、養和会テニスクラブ第三代目の世話役であられた西村博氏（S28 早大卒、三機工業 OB、96 歳）から、同氏が纏められた『養和会テニスクラブの歴史』をご提供いただき、貴重な情報を得ることができました。同著は、元三菱庭球同好会長の故・井手明彦氏のご要請によりまとめられたもので、時空を超えたご縁を感じた次第です。

本関係史は、三菱庭球同好会と三菱養和会とのテニスの繋がりを繙くことで、三菱庭球の歩みにおける「空白」を補完し、後進へ伝承することを目指したものです。

結びに、資料の提供から監修に至るまで多大なご協力を賜った西村博氏に、深甚なる敬意と感謝の意を表します。

2026 年（R8）4 月

三菱庭球同好会
審判長　牧村祐一（重工）

三菱倶楽部（丸の内）

三菱養和会（巣鴨スポーツセンター）

＜写真：三菱養和会 HP より＞

1．組織の変遷

1911 年(M44)の三菱庭球部誕生から、現在の三菱庭球同好会、三菱養和会まで 115 年間に亘る組織の変遷を総括する。

- ✓ 三菱庭球同好会は、三菱庭球部が源流で、染井コートをホームとしたが、戦中の 1943 年(S18)から戦後 1951 年（S26）迄の 9 年間は、組織活動を中止せざるを得なかった。
- ✓ この間は、1940 年（S15）年に創設された三菱養和会を通じて、その管理下にある染井コートでテニスを続ける状況にあった。財閥解体を受け、1946 年（S21）に三菱養和会は「養和会」に改称となる。「養和会テニスクラブ」が創設され、広く三菱以外の一般会員を含めて活動が行われた。
- ✓ 1951 年（S26）12 月、翌年の HI 盃復活に向け三菱庭球同好会は活動を再開。以降、三菱グループには三菱庭球同好会（各社コート）と養和会テニスクラブ（染井コート）の 2 つのテニス組織が存在したが、1973 年（S48）に養和会テニスクラブは閉鎖となった。

年代	組織の変遷　＜コートの動き＞	出来事・エピソード
1911 年 (M44)～	**三菱庭球部 誕生** ＜丸ノ内（八重洲）＞	丸ノ内建設所跡地に 1 面新設。当時は軟式。 深川佐賀町にも 1 面存在。
1914 年 (T3)～	**三菱倶楽部庭球部へ** ＜染井（現、巣鴨スポーツセンター）へ移転＞	三菱倶楽部に庭球部を統合。翌 1915 年に染井に 400m トラックとコート 1 面新設。1920 年硬式採用（関東関西戦は 1922 年から）。
1922 年 (T11)～	**三菱庭球同好会 設立** ＜染井（メイン）＋岩崎邸＞	岩崎彦彌太氏が銀製カップを寄贈。1923 年に第 8 回関東関西戦と第 1 回 HI 盃が同時開催。
1940 年 (S15)～	**財団法人 三菱養和会 設立** ＜染井＋開東閣＞	三菱倶楽部が三菱合資会社から分離・改組。 1941 年に開東閣 2 面新設するも空襲で焼失。 戦局悪化の中、染井コートを利用。
1943 年 (S18)～	戦争によりテニス活動停止	戦時下と戦後の財閥解体で 1951 年（S26）までの 9 年間 HI 盃が中止。
1946 年 (S21)～	養和会へ改称（独立経営） **養和会テニスクラブの誕生** ＜染井（修復・一般開放）＞	財閥解体により「三菱」冠称不可 。一般会員募集。旧三菱勢が主力となり活動を維持。 1950 年に第 1 回養和会トーナメント。
1951 年 (S26)～	12 月**三菱庭球同好会 活動再開** ＜千代田銀行 武蔵野コート＞	6 月の彦彌太氏の公職追放解除を受け HI 盃復活。同好会は、銀行ほか各社コートを使用。
1971 年 (S46)～	‘71 三菱養和会 旧名復帰 **‘73 養和会テニスクラブ閉鎖**	1970 年の三菱創業 100 年を機に名称復帰。 染井コートの転活用計画により閉鎖となる。
現在 2026 年	三菱庭球同好会：HI 盃・全三菱庭球大会を継承・発展	三菱養和会：巣鴨スポーツセンターで各種事業運営、テニスはスクールのみ。

２．三菱庭球同好会と三菱養和会の関係年表

1911 年 （M44）	◆三菱庭球部の誕生 ● M23 年に丸ノ内陸軍用地 84,000 坪が三菱社に払い下げとなり、丸の内オフィス街の開発が始まった。 ● M43 年に丸ノ内建設所が移転となり、その跡地を「三菱運動倶楽部」に開放。翌 M44 年に八重洲 1 丁目 1 番地（現在の丸の内パークビル）にテニスコート 1 面（T15 ビル竣工まで使用）が新設され「三菱庭球部」が誕生した。尚、三菱には深川区（現、江東区）佐賀町にも 1 面があった。
1914 年 （T3）	◆三菱倶楽部庭球部の設立 ● 9 月に三菱合資会社の組織として三菱倶楽部が設立された。そこに三菱庭球部が統合され、「三菱倶楽部庭球部」となった。 ● 久彌社長が保有する染井の約 1 万坪が三菱倶楽部に無償貸与、倶楽部ハウスは富士前町の岩崎邸の一部を移築して無償譲与された。 ● 会長は久彌社長、副会長は小弥太副社長。会員は約 3300 人。
1915 年 （T4）	● 染井敷地は（現在の巣鴨スポーツセンター辺り）杉林であったが、ここに 400ｍトラックを造り、そのトラックの中にテニスコート 1 面が完成した。
1916 年 （T5）	● トラック東側に 1 面増設。当時は軟式で 5 回ゲームであったため、1 面で間に合っていたが、次第に盛んになってきたことから増設された。 ● 第 1 回関東関西戦は、雨天中止＠神戸（重工和田コート）。以降は神戸、名古屋、東京を持ち回り開催と決定。最古の記録は第 5 回で 26 ペアが参加した。
1920 年 （T9）	● 本部は硬式を採用。関東関西戦は第 6 回大会の 1922 年から採用。 ● 染井に 3 面増設（計 5 面）
1922 年 （T11）	◆三菱庭球同好会の設立 ● 彦彌太氏から銀製カップが三菱倶楽部に寄贈された。戸外運動部担当幹事の荘田達弥氏が打合わせ会を行ない、試合名を「H.I.ロンドンカップ戦」（現在の HI 盃選手権試合）、運営は「三菱庭球同好会」を設立して行うことを決定した。会員からの会費をもとにスタート。 *（編者注記）同好会は HI 盃の運営機関であり、通常のテニス活動は三菱倶楽部庭球部として染井で行われていたと思われる。*
1923 年 （T12）	● 第 1 回 H.I.ロンドンカップ戦（7/29，30＠染井コート）。第 8 回関東関西戦と同時開催。
1925 年 （T14）	● 染井の 5 面では不足していたので、染井にコート 2 面増設承認。予算 3300 円（分散配置、計 7 面）。<三菱社社誌> ● 岩崎邸（龍岡町）にコート 1 面新設。庭球部に開放された。戦争末期まで染井と共にこのコートが利用された。

1926 年 (T15)	● 1925 年(T14)に帰国の彦彌太氏が、三菱合資会社に入社。1934 年(S9)年に副社長就任。1927 年（S2）に操子氏と結婚、1941 年（S16）に従四位昇叙、1967 年（S21）に永眠、72 才。
1935 年 (S10)	● 染井トラック西側にコート 7 面を新設（集約)、倶楽部ハウスも移転。整備担当は地所の大淵氏。杉林に囲まれ、バックが広い本格的なコートであった。新設の背景は東側の東京都区画整理計画なるも、その後計画は中止となる。
1940 年 (S15)	**◆財団法人 三菱養和会の設立** ● 三菱倶楽部が、三菱合資から分離、改組。小弥太社長が会長に。 「神を嗇（おし）みて和を養う」後漢書より。 支部 60，休養施設 90，会員 20,000 人超の巨大組織となる。 ● 組織改組に伴い、庭球は「三菱養和会 戸外運動部」の所掌となり、引き続き染井コートで、テニス活動が行われた。<三菱社社誌>
1941 年 (S16)	● 開東閣にコート 2 面新設（三菱養和会施設)。S20.5.27 空襲で廃墟と化す。
1942 年 (S17)	● 戦局の悪化により、この年に HI 盃は通算 20 回、関東関西戦は 27 回で一旦幕を閉じる。
1945 年 (S20)	● 8 月終戦。戦争末期には、染井のテニスコートが農地に、クラブハウスは半壊でテニス活動は停止。
1946 年 (S21)	**◆三菱養和会が「養和会」として独立経営、「養和会テニスクラブ」が誕生** ● 戦後速やかに染井コート 7 面、野球場とクラブハウスの修復がなされた。 ● 財閥解体に伴い、「三菱」の冠称は不可となり、一般会員募集が行われた。当時の主力メンバーは、大淵鉄太郎（地所)、野村義門（重工)、石井小一郎（地所)、牧野元（重工)、河尻慎（商事)、山岸成一（商事)、向井輝志（銀行）等、三菱関係者であった。 ● クラブには、会長がおらず大淵、野村が世話役。染井施設の総合管理人は柴田、運動場（含むテニスコート）の管理人は長島であった。 ● 会員の会費は数 100 円/月位か？（S30 頃の大卒初任給は約 10,000 円)。 ● 養和会が管理していた施設は染井のテニスコート、野球場、宿泊施設は、箱根、鎌倉（海の家）等であり、養和会会員は各施設を利用できた。テニスコートの利用は、まず養和会会員になってから「養和会テニスクラブ」に入会が必要だった。入会にはクラブ会員、または三菱のテニス関係者の紹介が条件であった。管理人室に和紙に筆で書かれた会員名簿があった。その後 S30 年代に入り、法人会員として日本鋼管総務部、山陽国際パルプが入会する頃から養和会テニスクラブの入会手続きのみとなり、クラブ会員の紹介で入会することができた。 ● 有志 39 名でダブルストーナメントが行われ、岩崎彦彌太・河尻組が優勝。 ● 染井コートは三菱専用ではなくなり、各社コートの新設が促された。

1947 年 （S22）	● 養和会では、休日に大淵，野村の両世話役を中心としたベテランのテニスマンが集まり、S24 年頃から旧制高校でテニス選手であった川崎太郎（三菱石油），川西弘（日清製粉），井本商三（古河電池），山本勇一（日本電気）等が加入し、メンバーが充実した。 ● 休日以外は学生、女子の会員が少なく、コートは空いていた。月に数回慶應高校庭球部の高山，吉村，柴田（染井総合管理者の子息）等が練習に来場。 ● クラブハウスは、独身寮「思斉寮」の南側。テニスコート北側にコート管理人の住居と会員の休憩室併用の日本家屋があり、2 代目管理人の鷲見家が入居した。建屋は、日本間 3 室、洋風応接間、ロッカー室、風呂場、厨房、管理人居室の構成で、日本間 3 室は大広間 1 室（24 畳）、中広間 2 室（各 16 畳）。他クラブとの懇親会、恒例の忘年会等は大広間で行われた。着替えは靴を脱ぎ、廊下を通ってロッカー室で行なわれた。ロッカーは木製で床は畳敷きであった。
1950 年 （S25）	● 8 月に第 1 回養和会トーナメント。 暑い時期に開かれたのは、テニスの試合は暑さに耐えなければいけないという、大淵のご意向によるものである。 シングルス優勝者は川西弘（日清製粉）、ダブルス優勝者は石井小一郎（三菱地所）・河尻慎（金商又一）組、準優勝は大淵・野村組。 ● 当時、石井小一郎は上皇のテニスを、川西弘は上皇妃の聖心女学院時代からのテニスを指導されていた。ご成婚後石井，川西のお二人で皇太子ご夫妻とテニスをされたとのことである。
1951 年 (S26)～	● 以降、養和会テニスクラブが解散となる 1973 年（S48）までの活動は別紙参照。この年に再開となる三菱庭球同好会と併行してテニス活動が行われた。 **◆HI 盃発会式（12 月、三菱庭球同好会が活動を再開）** ● 6 月に彦彌太氏が公職追放解除されたことを受け、各地区における HI 盃復活の気運をもとに、12 月に染井で発会式を行ない、翌 1952 年に復活大会の開催を決議した。 ● 全三菱横断の連絡機関は、三菱養和会が一般開放されたので、H.I.カップ戦以外になく、早期再開の声が挙がった。こうした機運と HI 盃の復活が、三菱グループ各社間の連携と結束を強め、大会精神の Horizontal Integration に繋がったと伝えられている。
1952 年 （S27）	● 復活第 1 回 HI 盃選手権、東西対抗戦、ベテラン（100 才）トーナメントを 7 月 29 日、30 日＠千代田銀行武蔵野コートで開催。
1970 年 （S45）	**三菱創業百年** ● 1870 年（M3）10 月に岩崎彌太郎氏が九十九商会として海運業を創めた。

1971 年 （S46）	◆**養和会は旧名の「三菱養和会」となる**
1973 年 （S48）	◆**養和会テニスクラブが閉鎖（6 月）** ● コートの敷地が三菱創業百年事業として転活用される計画があり、クラブは閉鎖に至った。三菱総合病院建設の噂があったが立ち消えとなり、現在の巣鴨スポーツセンターとなった。 ● 会員の総意で大淵に長年の功労を讃える記念として、芸大卒の中島裕制作の「大淵さんのテニスフォーム」を模したレリーフが贈呈された。
現在 2026 年	HI 盃・全三菱庭球大会は、復活以降、女子 D、グランドベテラン D、男子 D、女子 S と種目を充実させて現在に至る。庭球部誕生から 115 年の歴史を有す。

【参考文献】・『養和会テニスクラブの歴史』西村 博 著
・『三菱庭球の歩み』復活 10 周年（1961 年発行）、同 30 周年（1982 年発行），同 50 周年（2002 年発行）の記念誌、三菱庭球同好会 編
・『三菱社社誌』T3～S16 年、三菱史料館

【エピソード】

① 岩崎彦彌太氏と養和会テニスクラブ（西村氏談）

彦彌太氏は、戦後の公職追放という厳しい時代にあっても、龍岡町の岩崎邸から自転車で染井コートに度々来られ、世話役の大渕、野村氏等とテニスをされていた。当時、三菱関係者は彦彌太氏と接することに制約がかかっていたが、大淵氏は岩崎邸の営繕を担当していたこともあり、彦彌太氏と三菱の連絡窓口的な役割を果たされていた。

② 三菱倶楽部規則（T3.7.12 制定、9.1 より実施）

三菱合資の各場所倶楽部を、「三菱倶楽部」の下に統一。目的は、従事者の相互の親睦と身心の健全を図ること。初代会長は久彌社長。第 13 条に、「本倶楽部ノ経費ハ三菱合資会社社長ノ下附金（寄付金）ヲ以テ之ヲ支弁ス」とある。

③ 三菱養和会のテニススクール

養和会テニスクラブの閉鎖後、三菱創業百年事業として設立された巣鴨スポーツセンターで体育館を使用しテニススクール事業が行われた。レジェンド藤井道雄氏（電機、デ杯選手、ＨＩ盃 7 回優勝）は 1992 年にセンター支配人に就任、スクールの強化に取組まれた。
また、三井の宮城淳氏（全米ダブルス選手権優勝、全三井全三菱テニス大会の三井キャプテン）が、養和会の評議員を務められた。

④ HI 盃・全三菱庭球大会の運営主体

大会の運営主体は、三菱庭球同好会であるが、1978 年頃から金曜会事務局の月曜会（総務部長会）より“大会運営の養和会への移管”が提起された。最終的に「本大会は岩崎彦彌太様より寄贈戴いたＨＩカップを競う大会で、80 年の長きに亘り金曜会支援の下で運営、また現行の助成方法によりスムースな大会運営がなされていることから、今後も従来通りの対応としたい」との同好会の意を受け、2004 年（H10）2 月の月曜会で了承となった。

３．養和会テニスクラブトーナメントの戦績

戦績は、クラブ解散時にテニスコート管理人家屋（兼休憩室内）の鴨居に掲示され記録を西村氏が転載したもの。昭和 20 年代はトーナメント優勝者、対外試合の優勝者記録が世話人の指示でノートに記帳されていた。昭和 32 年大淵氏が芦屋大会で優勝された機会に、会員から優勝者記録を休憩室に掲示の要望があり、和紙に筆で書かれた優勝者記録が掲示された。

その後、洋紙にサインペンとなり、昭和 47 年の優勝者記録が最後になった。

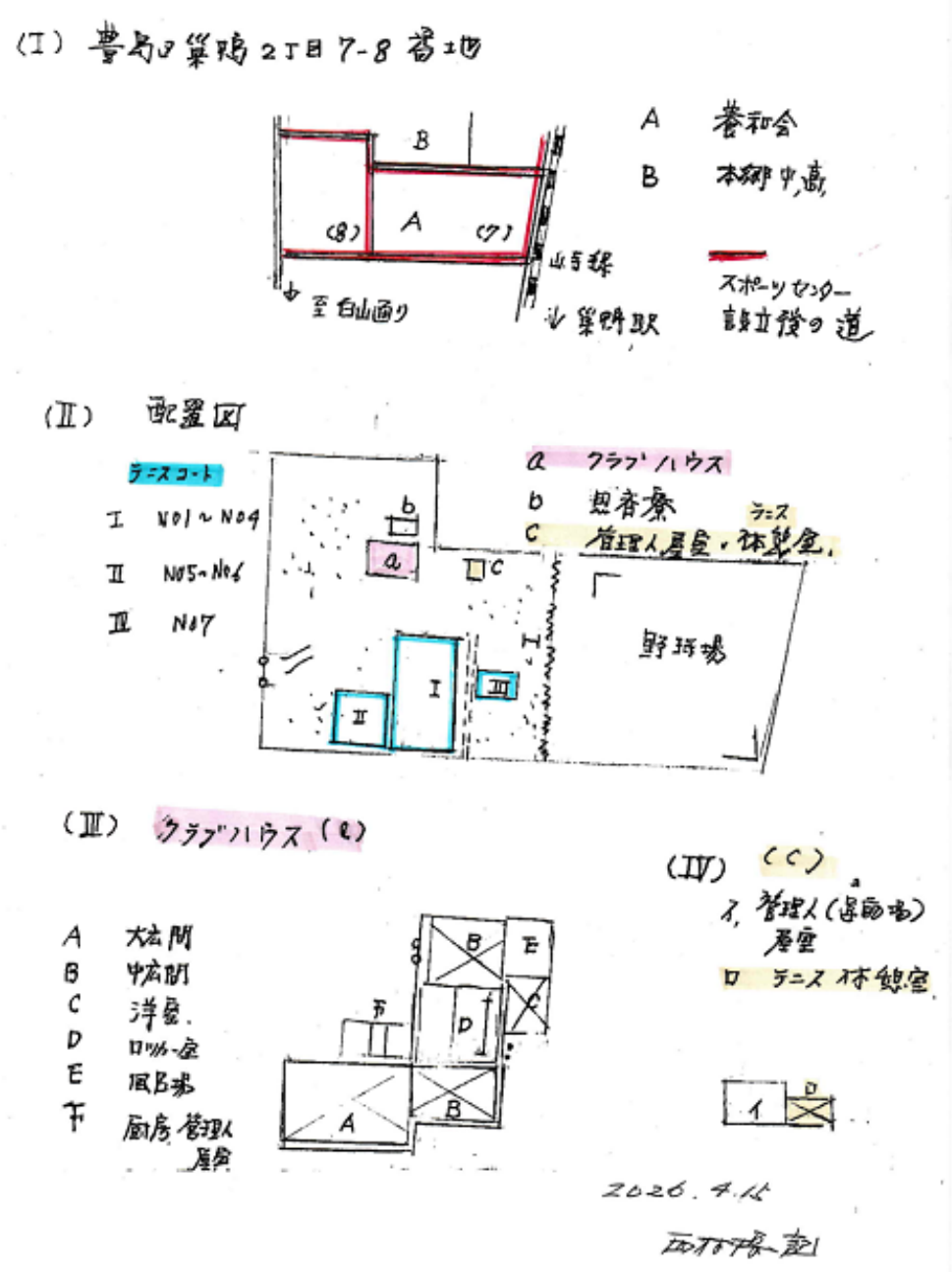
	男子Ｓ優勝（下段：Ｄ優勝）	備考（女子、壮年等）
1950 (S25)	川西弘（日清製粉） 石井（地所）・河尻組（金商）	
1952 (S27)	平井（法政、商事） 平井・正立組（商事）	加茂幸子（全英日本人女性初出場）、朝長慶子（田園テニスクラブ）来場、招待試合。
1953 (S28)	川西弘（日清製粉） 平井・正立組（商事）	世話役が大渕、野村➡川崎太郎（石油）、正立一郎（商事）へ。
1954 (S29)	山岸二郎（デ杯、不二商事） 成田・小島組（慶応）	千代田銀行コートで銀行と懇親試合。
1955 (S30)	成田達吉（慶大） 川崎・井本組（石油・日本加工製紙）	東京クラブ対抗Ｃ組（成田，小島，長井，鷲見）、社会人トーナメントＣ組（Ｓ小島健、Ｄ西村・平松組）優勝。日本鋼管，山陽国策パルプが法人会員。
1956 (S31)	川崎太郎（石油） 柴田・鷲見組（重工・立教）	
1957 (S32)	鷲見桂一（立教） 川崎・井本組（石油・日本加工製紙）	ＳはＡ，Ｂ の２種目に。大淵先輩が第１回目の全国グランドベテラン芦屋大会でＳ優勝、クラブハウスで優勝祝賀会を行う。
1958 (S33)	埼口正也（早大） 川崎・井本組（同前年度）	Ｂ級は松平斉義（学習院）。新設の女子Ｓは柴田良枝（重工）、全国ＧＶ芦屋Ｓで大淵２連覇。
1959 (S34)	池田隆（早大） 柴田・鷲見組（自動車・立教）	世話役が川崎，正立から大淵氏指名の西村博（三機工業）。全国ＧＶ芦屋 60 才以上Ｄは大淵・海老原組。秋に前年新設の神宮外苑 TC と懇親試合。
1960 (S35)	鷲見桂一 鷲見・河内組（立教）	樽谷紀久が女子Ｓと、新設の女子Ｄ，ＭＩＸ-Ｄで三冠。
1961～ (S36)	河内進（立教）,翌年も優勝	女子Ｓは樽谷紀久が連続優勝。全国ＧＶ芦屋Ｄで大淵先輩優勝。コートキーパーは御供亀三郎。
1963 (S38)	佐伯晴敏（重工） 佐伯・阪 組（重工）	新設の壮年Ｓは菊地高。 ＊暑い８月の時期変更の要望に対し、大淵先輩は、テニスの試合は暑さに勝たなければならない、養和会トーナメントの伝統である、として却下された。
1964～ (S39)	64(S39)鷲見桂一（立教），65(S40)河内進（立教），66(S41)青木久雄（立教） 66(S41)磯部修一（日本電気）・池田隆（東京運輸倉庫）組	
1970～	70(S45)池田隆，72(S47)池田隆，磯部修一（トーナメント最後の優勝者）	

４．染井運動場の配置

以下は、西村博氏、記憶をもとに昭和 20 年頃の配置図を作成してくださったものである。

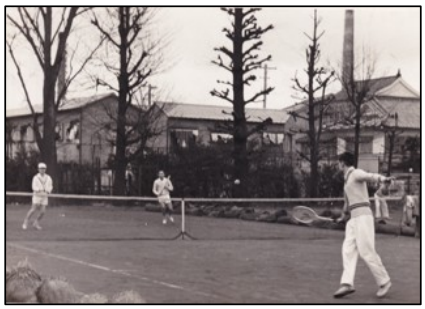
ロッカーのあるクラブハウス（総合管理人が居住）に加えて、別棟で管理人室（テニス、野球場管理人が居住）があり、テニスの時はこの休憩室を利用した。

大広間で懇親会等を行う時は、クラブハウスの厨房で管理人夫人が賄い等を行った。当時の宴会料理は、七輪でのすきやきが主であった。



5．養和会テニスクラブの写真集　（提供：西村 博氏）

No2 コート



No 7 コート

奥の建屋は管理人室

S25　西村氏

S27 藤棚　左から芥川、大淵、西村、成田、海老原、山本各氏

S2 7　納会（大広間）

S32　大淵氏（前列左から３番目）　第一回全国グランドベテラン芦屋大会　優勝祝賀会

S40　養和会テニストーナメント

箱根合宿

田園百寿庭球大会　左：川西氏

６．養和会テニスクラブ閉鎖時のこと

元世話役　西村 博 記

昭和 46 年、養和会が三菱養和会の名称になった秋頃からテニスクラブ閉鎖の話が伝わってきた。私は世話役の立場で、会員の先輩格の桑島喜平（千代田火災）等と存続対策を協議した。

しかし養和会自体の事業形態が戦前に戻されたこと、三菱各社が自社のテニスコートを持ち三菱系の会員が少なくなっていたこと、また高度経済成長期に巣鴨駅に近い良い立地条件であったこと等からクラブ存続は厳しい状況であった。

一番の問題点は、三菱創業百年記念事業としての同地を転活用する計画であったが、この計画案は、非公開事項であったので一切会員には知らせなかった。
一部の会員から、クラブ閉鎖の補償を養和会本部と交渉すべきとの話もあったが、個人会員／法人会員，入会時期等、区別が複雑で問題点が多かった。大淵先輩に意見をもとめたが、「染井のコートは一番思い出深い所であるのでクラブの解散は残念であるが、時節柄致し方ない、穏便に対応してもらいたい、」とのご指示があった。

このような状況の中で、世話役として存続運動を継続は無理と判断し、大淵先輩のご意向も踏まえて、私一人で養和会本部に行き、閉鎖時期の打合せを行った。
会員の長老からは、君はバトリオ（第二次世界大戦の伊首相で、米，英，仏に無条件降伏）だというご批判を受けた。

クラブの解散が決まってから、会員の総意で大淵先輩の長年の功労を讃える記念として、会員の芸大卒の中島裕制作の「大淵さんのテニスフォーム」を模したレリーフをお贈りした。
解散までの 27 年間に在籍した会員は高い樹木に囲まれ、バックは広く、良く整備されたクレーコートでプレーできたことに大変感謝していた。

昭和 48 年 6 月に多くの会員が参加し、懇親試合後、メインコートで行われたお別れの会をもって 27 年間の歴史に幕を閉じた。養和会本部からは、当日ビール 2 打が贈られた。閉鎖後は、三菱系の会員、高塚寛氏（重工総務部長）から世話役としての労をねぎらう手紙を頂いた。

尚、『養和会テニスクラブの歴史』は、クラブ解散時の世話役の責任者として“伝統ある染井のテニスクラブ 27 年”の歴史をまとめたものである。

元資料は世話役就任時に大淵先輩から頂いた資料(ガリ版刷)、三菱庭球同好会編の HI 盃復活 10 周年誌、30 周年誌、養和会テニスクラブ優勝者記録等である。10 周年誌、30 周年誌では、養和会の戦後の歴史は「一般に公開され空白と幾多の変遷を経た」と記載されている。

この記録誌は、養和会テニスクラブの第 3 回目の同窓会を解散半世紀後の 2024 年に東洋文庫内小岩井農場オリエント・カフェで行った際、出席者にお渡しした。

三菱庭球同好会 10 代会長の井手明彦氏（関町テニスクラブの友人）には完成したらお渡しする約束であったが、残念ながら叶わず、今般、ご縁があってその内容を三菱庭球同好会に継承できたことを大変うれしく思う次第である。

【参考資料】

① 三菱の庭球

『三菱庭球の歩み』HI 盃復活 50 周年記念誌に記載されたものを紹介します。初稿の復活 10 周年記念誌をベースにして編集されたものです。

三菱のテニスの歴史については、ホームページ（右ＱＲコード）でも詳しく記録されています。

１．三菱倶楽部本部テニスコート

三菱の庭球といえば、戦前の庭球人なら、誰でも染井のコートを連想するであろう。染井の土地約１万坪は、大正３年９月三菱倶楽部が創設された時に茅町様（岩崎久彌社長の称）特別の御厚意により、無償貸与され、又同構内にある倶楽部ハウス（建坪約１２５坪）は、富士前町岩崎邸の一部を移築して無償譲渡されたものである。

これらは昭和２１年本社が解体され、菱和会が独立経営に至るまで、三菱だけで利用されていた。

本部庭球コートは、染井倶楽部設立以前、すでに丸ノ内（八重洲ビル敷地）に１面と深川区佐賀町に１面を有していたが、庭球愛好者に多く使用されたのは、丸ノ内のコートである。

このコートは、大正１５年八重洲ビルの新築工事が着手されるまで使用されていた。三菱倶楽部創設当時の、染井倶楽部敷地は、殆ど森林であって、杉林が大部分を占めていた。大正４年にこれらの杉林の一部を切り開いて４００メートルのトラック（現在の野球場）を造り、そのトラックの中に、テニスコートを１面設けた。

当時の庭球は殆ど軟式であって、正式の試合は、５回ゲームで、練習の時は１ゲームごとに替わるため、１面のコートで間に合っていたが、その後庭球は次第に盛んになり大正５年からは、東京方面と関西方面との対抗試合が行われることになったので、在来のコートと並べて更に１面増設することにした。

慶応は大正２年に軟式から硬式に替えたが、その他は、依然として軟式を固執していた。しかし時代の波に抗しきれず、大正８年から大正１０年にかけて、殆ど硬式を始めるようになった。

その結果、従来の２面では到底部員の要求を満たすことが出来なくなり、更に、トラックの東側に３面増設することとなった。大正１２年からは、新たに、ＨＩカップ戦が誕生し関東、関西戦と併行して催されることとなった。

三菱倶楽部開設当時の染井運動場風景

これが動機となって庭球熱は、ますます盛んになり、５面のコートでさえ不足を告げるほどになってきた。これを補うため大正１４年に岩崎彦彌太様は、龍岡町に、コートを１面造られ、庭球部員のために開放された。このコート開きは、河手捨二氏、谷田友治氏の両長老指導のもとで和やかに行われた。なおこのコートでは、当時

有名な、リチャード、原田武一の両選手を招き、部員のために、模範試合を催したこともある。

庭球部員は、戦争末期までここを使用させていただいたので我々にとっては染井コートと共に忘れ難いコートの一つである。

昭和１０年に、倶楽部ハウスを移転し、そこを中心として、テニスコートを７面新設した。これは東京市における区画整理案が染井倶楽部にも及び、電車庫寄りの一部が道路に、又トラックや、テニスコートのある所が開放地に予定されたので、これらの土地を、東山農事株式会社に返地することとなったためである。

その後、財政の関係その他の都合で、区画整理は、実行に至らず、うやむやになり、開放予定地は一時東山農事株式会社の、野球場となったが、その後再び三菱倶楽部が使用することとなった。

しかし、戦争末期には食糧難甚だしく、野球場やテニスコートの存在は許されなくなり、運動場は農地として社員の食糧生産の場に変わった。

終戦後の昭和２１年は食糧事情まだ困難であったにも拘らず、テニスコート７面と爆弾のため半壊の憂き目に遭った倶楽部ハウスは、いち速く修復された。

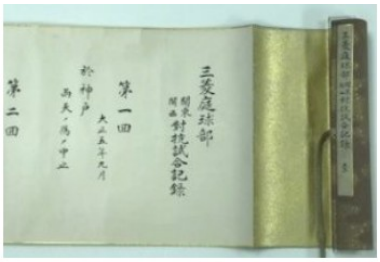
しかし、昭和２１年末より独立経営となった養和会は、その経営上やむを得ず一般より会員を募集することとなり、染井倶楽部は、三菱庭球人だけで独占することが出来なくなるに至った。

なお、昭和１６年には、高輪開東閣の日本家屋並びに、この隣接土地を一般社員が利用出来ることとなったので、ピンポン室、玉突場等を造ると共に、接待用テニスコート２面新設した。このコート開きには物故せる庭球同好会々員の慰霊祭並びに、追悼庭球試合を行った。これらの施設は、全て三菱養和会の附属施設として、利用されていたが、昭和２０年５月２７日の空襲によって全てが廃墟と化してしまった。

養和会は戦後、一般に公開され、幾多の変遷を経たが、昭和４６年には会の名称も旧名「三菱養和会」に復し、更に、戦後３５年にして事業形態は再び戦前の姿に戻された。一方、染井倶楽部コートは、昭和５０年１０月、三菱創業百年記念事業の一環として、その他の施設（巣鴨集会所、思斉寮、運動場）共々廃され、近代的スポーツの殿堂巣鴨スポーツセンター（体育館、運動場）に変貌を遂げた。

２．関東関西戦

大正３年に三菱倶楽部が創設されたが、その当時は、今の八重洲ビルの施地内に、テニスコートと並んで、木造平家建の倶楽部ハウスがあった。小さいながら玉突場、談話室、柔剣道の道場もあったので、テニスの打合せは、大概この談話室を利用した。



関東関西戦記録の巻物（三菱史料館保管）

この時分は三菱合資会社、銀行部、鉱山部、造船部等と言われていた時代なので、テニスをする人も現在と比べ非常に少なかった。

大正４年にはだれいうとなく関西方面への遠征話が持ち上がった。

早速連絡を取ったところ、先方も快く承諾してくれたので翌大正５年９月に第１回関東関西戦を神戸で開催することとした。同時にその境界線を関ヶ原にすることにきめた。

大正５年９月関東遠征軍は谷田友治、上村琢磨両監督に引率され、満を持して、神戸に向かったが、試合当日は、不幸雨に祟られ、せっかくの試合も、中止のやむなきに至った。しかし、関東関西戦は、これによって完全に確立された。なお、この懇親会において次回は東京、その次は名古屋で開催することも決まり、これが慣例となって爾後の試合は３地方で行われるようになった。

本部庭球部も大正９年より、硬式庭球を採用することにしたが、軟式庭球に愛着の念断ち難き人々も相当あったので、全部硬式庭球に切り替えるわけにも至らなかった。

しかし、関西方面は、すでに大部分硬式を採用していたので大正１０年における第６回関東関西戦より、硬式にて、試合をしたいと関西方から話があったが、体制まだ整わざる関東軍にとっては到底これを受け入れることが出来なかったため、折衝の末ようやく話がまとまり、大正１１年度より必ず硬式でという約束のもとに大正１０年度は軟式にて試合を行った。これが軟式で行う対抗試合の最後である。

大正１４年に至り、戸外運動部担当幹事荘田達弥氏の了解を得、倶楽部事務室とも打合せ、本部庭球経常費をもって、銀製カップを作り、関東、関西戦のカップとした。これはＨＩカップが動機となって生まれたものである。

昭和１７年金属回収令の発令は、金銀製品にも及び、昭和１９年倶楽部所有のカップ類と共にこのカップも供出してしまった。

毎日のラジオは日本軍勝利の放送ばかりであった。しかし食糧は日に日に不足し、交通は極度に制限され、対抗試合は全く不可能となったので、昭和１７年度を最後として、ＨＩカップ戦並びに関東関西戦共終末を告げた次第である。

３．ＨＩカップ戦と庭球同好会

岩崎彦彌太様は大正１１年１０月ロンドンに御外遊のみぎり三菱倶楽部庭球部に、銀製カップを寄贈されたので、戸外運動部担当幹事荘田達弥氏は直ちに打合会を行った。

同会合には庭球部長老、河手捨二氏、山岸慶之助氏、谷田友治氏、倶楽部総務部担当幹事小木植氏、その他庭球部諸先輩並びに各社戸外運動部庭球委員等、総勢約４０名に及んだ。

荘田担当幹事からカップの披露があり、引続き打合会を開いた。

打合せ事項

1.　カップの名称　　ＨＩロンドンカップとす。
2.　カップの使途　　全日本三菱硬式庭球シングルス試合を行いこの優勝者に授与する。
　　ただし、本盃には氏名を刻み副盃を贈呈する。
3.　試合の名称　　ＨＩロンドンカップ戦。
4.　試合の運営　　三菱庭球同好会を設立し同会にて運営する。

5.　同行会委員（荘田担当幹事より指名）
　　向井輝志、桑原芳雄、大淵鉄太郎
6.　ＨＩロンドンカップ戦　　第１回は大正１２年東京にて開催の事、同時に委員長は河手捨二氏と決定。

以　上

三委員は同席上において、基金募集の相談をし、直ちに各自の帽子を持ち回り、席上を一周し、応分の寄附金をこの帽子の中に入れてもらった。
これは庭球同好会最初の基金である。
　註　ＨＩロンドンカップはその後単にＨＩカップというようになった。
その後関係者は、数回会合打合せの上、ＨＩカップ庭球試合の規定を下記の通り定めた。

ＨＩカップ庭球試合規定

試合の種類
　本試合は硬式庭球「シングル」とす。
参加資格
　日本全国の三菱社員は何人も本試合に参加することを得。
予選試合区域
　全国を下記の７予選区域に分つ
　１．北海道地方　北海道一円
　２．関東地方　　東京横浜及其附近（東北地方を含む）
　３．中京地方　　名古屋附近
　４．京阪地方　　京都大阪及其附近（北陸地方を含む）
　５．神戸地方　　神戸高砂及其附近（中国及四国を含む）
　６．関門若地方　九州北部（筑豊地方を含む）
　７．長崎地方　　長崎、佐世保、唐津及其附近
試合委員
　試合事務執行の為め各予選区域に委員１名以上、試合挙行地に委員長１名を置く。委員は各回予選区域より選出し委員長は前任者の指名により交代す。
予選々手
　予選々手は委員の定むる方法日時及場所に於て各区域毎に之を選出す。試合の方法によらずして直ちに予選々手を推薦するを許さず。
関東中京、京阪及神戸地方の予選々手は必ず定例関東、関西対抗庭球試合に参加せざるべからず。委員は優勝試合の２０日前迄に予選選手（各地方より１名、但し関東地方、京阪地方、神戸地方は２名）の氏名又は其有無を委員長に通知すべし。
　予選々手が已むを得ざる事情により優勝試合に出場するを得ざる場合は棄権せるものと認む。
優勝試合
　優勝試合は定例関東、関西対抗庭球試合の際其場所に於て挙行す。

優勝試合の組合せは抽籤によるべく、試合は３「セット」とす、但し「ファイナル」は５「セット」のこと。

最優勝者は其年度の三菱社内の「チャンピオンシップ」を獲得し次回の試合迄本「カップ」を保有す。

「カップ」保管については保有者及其地方委員協同その責に任ず。

附　則

本試合は日本庭球協会所定の規則に依るものとす。

以　上

以上の規定が出来たので河手委員長より規定書同封の上大正１２年７月２９日、３０日の両日染井コートにおいて第１回ＨＩカップ戦並びに第８回関東関西戦を行う旨各地区毎に招請状を発送した。

大正１２年７月２９日、３０日の連休を利用した第１回ＨＩカップ戦は、河手委員長の下に、染井コートにおいて全国より選抜された選手８名によって関東関西戦と並行して行われた。

選手内訳

北海道地方　１名
関東地方　　２名　槇原　覚、桑原芳雄
中京地方　　１名
京阪地方　　１名
神戸地方　　１名
関門若地方　１名　岩永侃爾
長崎地方　　１名

この輝ける栄冠を獲得した最初の選手は、関門若地方より選出された岩永侃爾選手であった。

第１回ＨＩカップ戦終了後、次回は神戸において開催することに決定したので、同好会委員は、これに処するため、数次打合せをなし、同好会規定を定め、同時に名簿を作成し今後におけるＨＩカップ戦の運営に当ることとした。

爾後、会を重ねること２０回、昭和１７年を最後として、関東、関西戦と共に、一応幕を閉じることとなった。

４．復活せるＨＩカップ戦と関東関西戦及び百歳トーナメント

連合軍総司令部によって行われた財閥解体の大旋風は、三菱養和会をも四散せしめ、三菱各社の横の連絡は全く断たれた形となった。

しかし昭和２１年、染井コートの復活は、自然に同好会のメンバーを染井コートに集め、同年７月早くも、戦後第１回の庭球懇親会を開くに至り、岩崎彦彌太様始め、出席者３９名にも達した。

昭和２１年末より独立経営となった養和会には続々外郭団体が入会するようになったので、自然に三菱の独占は許されなくなった。しかし庭球同好会はこの間４回程懇親会を催し、その都度ＨＩカップ戦並びに関東関西戦復活の話が持上がり、１日も早くこれが実現を祈った。

東京における三菱専用コートの喪失は、自然に各社専属コートの設立を促し、銀行、金属鉱業、電機、その他もそれぞれのコートを有するようになった。

昭和２６年に至り、我々の念願はようやく実現の緒に付き、昭和２７年より、ＨＩカップ戦並びに関東関西戦を復活することになった。この報に接した関西、中京、九州等各地の有志は双手を挙げて復活に賛意を表した。

ＨＩ盃発会式　S26年12月　染井

復活第１回ＨＩカップ戦・関東関西戦は昭和２７年９月２１日東京千代田銀行（三菱銀行）武蔵野コートにおいて行うこととし、同時に４５歳以上のダブルス百才トーナメントも新たに設け、戦前に増す庭球大懇親試合を挙行する運びとなった。

千代田銀行がこの催しのため３面のコートを５面に拡張してくれたことに対し我々は深甚なる謝意を表する次第である。

伝統あるＨＩカップは関東関西戦カップと共に金属回収令によって供出されたものとなっていたので、岩崎様には復活ＨＩカップ戦のために新たにカップを寄贈して下さることになった。石井委員は直ちに銀座の御木本に依頼し、見事な銀製大カップを製作した。開催期日直前になって、旧ＨＩカップは偶然にも、戦前最後の優勝者林新緑氏（中京）が戦火を受けたにもかかわらず、これを保管していることが判明したので、新カップは岩崎様の貴意を得、百才トーナメントの優勝盃とすることにきめた理である。

昭和２７年９月２１日第１回復活庭球試合は、地所会社石黒委員長の下に、天候にも恵まれ、千代田銀行コートにおいて、岩崎様以下百名の選手を集めて予定通り開催され、和気あいあいの内に滞りなく終了した。

５．復活後の全三菱庭球大会と庭球同好会

復活第２回大会は、昭和２８年神戸和田コートにて開かれ、この年、有志により関東関西戦（一般に東西対抗と称される）のための優勝旗が作製された。

以後、大会は毎年、開催地を東京、関西、名古屋より選びつつ、三菱各社社長を順次大会委員長として開催され、岩崎彦彌太様のご出席を得て年年隆盛を重ね、昭和３６年には参加選手２５０人に上る盛大な復活十周年記念大会（大会委員長柴田周吉氏）を銀行武蔵野グランドで行った。併せて十周年記念式典を三菱本館（現在の三菱ビルの前身）大食堂にて行い、創始以来の三菱庭球の隆盛を寿ぎ、岩崎彦彌太様並びに長老各位に対し同好の士一同より謝意を表した。又三菱庭球５０年余の歴史と記録をまとめ、記念冊子「三菱庭球の歩み」が発行された。

昭和４２年９月、岩崎彦彌太様御逝去せられる。同年の第１６回大会は、岩崎様追悼大会として御遺影を掲げ、三菱庭球人全員が岩崎様の御遺徳を偲び、御冥福を祈った。

全三菱庭球大会は、三菱関係会社がもれなく参加する大会として、ますます発展を続け、大会種目としては、昭和４７年岩崎様御令閨、操子様よりカップを御寄贈頂いて、同年第２１回大会より女子ダブルストーナメント（全国予選を経た各地区代表８組による）を加えることとなった。

なお、百才トーナメントは、参加壮年選手の増加と共に資格名称が改められ、昭和３３年に百五才、昭和３８年に百十才、昭和５３年より百十五才、平成９年より百二十才トーナメントとなり、ますます盛んなイベントとなっている。この勢いは止まるところを知らず、昭和５８年には岩崎寛彌様からカップ寄贈を受け、六十五歳以上のペアによる百三十才トーナメントが設けられた。

昭和４９年７月には、日中国交回復を記念して来日中の中国ナショナルチームを銀行武蔵野グランドに招き、全三菱チームとの親善試合を行った。このほか同好会の対外試合としては、昭和２９年を第１回として、全三菱・全三井対抗戦（一般男子・女子・壮年各ダブルス）を行って来ている。

ＨＩ盃選手権試合・全三菱庭球大会の運営は、三菱各社の持ち回りにより毎年の幹事会社（幹事会社社長を大会委員長とする）を担当して頂いているが、昭和５０年７月の金曜会にて同年以降の幹事会社の担当順が決定され今日に至っている。

本年平成１３年は、復活第５０回大会を迎えたが、本大会は、大正５年（１９１６年）第１回関東関西戦から通算第７４回の全三菱庭球大会であり、ＨＩ盃選手権試合としては大正１２年（１９２３年）の第１回選手権試合より通算６７回の歴史のある大会である。「ＨＩ盃は、三菱グループ関係者の〝横の繋がり〟すなわち“Horizontal Integration”の象徴にほかならない」との先輩のお言葉を体して、この大会がグループの行事として意義のある盛大な大会として、今後も発展して行くことを確信する次第である。

なお、復活後、歴代の三菱庭球同好会会長並びに「三菱庭球同好会会則」（省略）を附記する。

歴代同好会会長

昭和４４年３月まで	野村 義門氏（重工）
昭和４６年１０月まで	中村 基孝氏（商事）
昭和４６年１２月まで	牧田 与一郎氏（重工）
昭和５６年まで	古賀 繁一氏（重工）
昭和６１年まで	田部 文一郎氏（商事）
平成２年まで	鈴木 永二氏（化成）
平成８年まで	飯田 庸太郎氏（重工）
平成 15 年まで	藤村 正哉氏（マテリアル）
平成 19 年まで	岸 暁氏（銀行）
平成 28 年まで	井手 明彦氏（マテリアル）
令和５年まで	大宮 英明氏（重工）
現在	隅 修三氏（海上）

銀行　武蔵野コート 2021

② 三菱庭球部が誕生する迄（HI 盃復活 10 周年記念誌より）

大淵鉄太郎

大渕鉄太郎氏

丸ノ内陸軍用地八万四千坪、三崎町陸軍練兵場二万三千坪合計十万七千坪の土地を百武拾八万円で払下げ願度いと云う願書を、明治二十三年三月五日提出した処先方はしびれを切らして待っていたらしく、第一師団監督部長の名前で、翌六日「願之趣聞届候事」と云う許可書が下附された。即ち丸ノ内は明治二十三年三月六日から三菱社の所有になったのである。

当時神田区淡路町二丁目十一番地所在三菱社に於ては、払下げ後の丸ノ内をオフィス街とする構想が既に出来ておったので、同年九月には「丸ノ内建築所」（課又は係に該当）を設けて丸ノ内の実施計画に当らせた。

翌二十四年には麹町区八重洲町一丁目一番地（八重洲ビル敷地）西南側に丸ノ内建築所の建物を新築して、本社より此処に移し、丸ノ内の建設に関する一切を此処で取扱わせる事とした。

翌二十五年一月より第一号館（東九号館「三菱銀行向側の建物」）の建築に着手二十七年十二月竣工したが、三菱合資会社（明治二十六年十一月十五日設立）は完成前の七月一日神田淡路町より、この新築建物に移転した。

明治二十七、八年に於ける日清戦争の大勝は、日本経済の発展を促進し、越えて同三十三年の北京に於ける義和団の変には列強に伍して、勇猛果敢に戦い、国威の発揚に大なる貢献をなした、従って日本の産業は益々発展の一途を辿るに至った。

明治三十六年には、三菱合資会社も、社業の発展に伴い人員著しく増加したので、社員相互の親睦と融和を計る目的のもとに組織だった倶楽部を設ける事となり「三菱運動倶楽部」と称し、丸ノ内建築所の一部を仕切って倶楽部室とし、此処に玉突場、碁、将棋室等を開設したのが、倶楽部の濫觴である。

明治四十三年十月一日丸ノ内建築所は、地所課所管となり、地所課営繕係となって第十一号館（昭和三十六年二月取毀千代田ビル増築工事中）に移転した。

移転後の丸ノ内建築所の建物は全部倶楽部建物として使用することとなり、之に附随した、材料置場や下小屋等を整理して、八重洲町一丁目一番地（八重洲ビル敷地全部）は倶楽部の為に開放され、翌四十四年より漸次倶楽部施設を拡充し、柔剣道々場、弓術場、更に敷地北西にはテニスコートを新設され茲に始めて三菱庭球部の誕生を見るに至った。

（註 全国的に統合された三菱倶楽部は大正三年九月設立）

七年目に再開されたＨＩカップ戦

戦争は昭和二十年に終結したのに、どうしてＨＩカップ戦は、七年間も放任していたろうと、疑問をもつ方々が、相当多い事と思われるので、その事に就いて、簡単に申述べて見たいと思う。

岩崎彦弥太様が、公職追放になったのは、昭和二十二年で岩崎様が経営されて居られるブラジルの農場が解除になったのは、昭和二十五年十一月であった。我々庭球部員は、この報に接し岩崎様も遠からず解除になられる前兆ではないかと、だれも思う様になった。

終戦後、染井のテニスコートがいち早く復活したので、我々は度々会合を催し、その都度、岩崎様に御出でを願って、テニスをしながら一日を楽しんでいたが、ブラジル解除の報に接した時、催したテニスの集りは、非常に明るい気分で、誰の胸にも、ＨＩカップ戦の再開は時の問題であると考える様になった。

果して翌二十六年六月、公職追放解除の朗報に接したので、早速中京、関西、九州の各方面にＨＩカップ戦を再開したい旨の連絡をした。

有志の人達四、五人で、岩崎様の御供をして九州方面迄も、テニス行脚に出掛けたのは其の頃の事である。それとなく各地の意向を探った処、何処でも我々と同様出来るだけ早く、ＨＩカップ戦の復活を望んで居る事がわかった。

全三菱縦横の連絡機関であった「三菱養和会」は、本社解体後「養和会」と改称、一般に開放される事となったので、全三菱縦横の連絡機関は、残されたＨＩカップ戦以外にはない。
一日も早く再開しなければならない、好機は到来した、この機会を逃してはならないと、我々は早速再開の準備に取り掛った。

かくして、復活第一回ＨＩカップ戦は、岩崎様公職追放解除の翌二十七年、三菱関係各社の関心と、協力のもとに、千代田銀行コートに於て、石黒俊夫氏委員長となって、再開する運びとなった次第である。

三菱養和会設立に際して

会長　岩崎小彌太

和を養い和を貴ぶは三菱所属社員の伝統的精神なり。

事業に各種の分化あり組織に各般の分系有りと雖(いえど)も、社員相互、相和し相睦び、協力一心、社務に鞅掌し、因(えっ)て以て国家の公益、民人の福祉に寄与せんとするは、創社以来不動の信条たり。是を以て本社の前身、三菱合資会社の時代に於ては早くも各地に於て社友親睦の諸設備を為し、大正9年に至りては、更に時勢の進運に顧みて其施設を整備し、旧来各支店其他鉱山炭鉱造船所等各部局に散在せる社交機関を横断的に統一し、茲(ここ)に三菱倶楽部を設立するに至れり。本部は之を本社内に置き、支部は之を主要都市並に各事業所に設く。斯くて倶楽部に於て経営挙行せる諸事業は機関雑誌の発行、講演会の開催、体育運動の励行、社員並に其家族の為めの慰安保健を目的とする休養寮舎の設立等、其種目二三にして止らずと雖も、要は社員各自が之に由りて健全なる身心を錬成し、上和下睦、総力を挙げて以て奉公の実を期するに在り。爾来20幾星霜、倶楽部は日に月に其内容を充実し、今日に於ては、支部の数約60、休養寮舎其他の施設の数90余、而(しか)して設立当初僅かに3千3百を数へたる会員は、今や其数実に2万有余を算するに至れり。時局の急転と社運の隆昌とは更に組織の拡大強化を要請す。是に於て今次また倶楽部の制度を廃して、改めて財団法人三菱養和会を設立し、其事業一切を三菱社より分離して、之を独立の機関と為せり。思ふに理想と信条とに本づける不動の趣旨方針は両者素より其の揆を一にすると雖も、事業の維持拡張は之に由りて更に一段の便益を保証せらるべし。刻下邦国(こっかほうこく)の情勢は内外一致、上下の戮力(りくりょく)に待つ。此の時に当り我三菱所属社員諸君が常に伝統の精神に回顧そ、先づ社内の和を養ふて然る後億兆一心の大和に貢献せんことは予の切に願望して止まざる所なり。

昭和16年2月

三菱養和会教条

一、 日々は是れ好日なり人生は到る処修養の道場なりと知るべし

一、 書を読むは特(ひと)り愉楽の為めのみに非ず知見を広めまた清明の心を保つに資すべし

一、 囲碁作詩歌など趣味に遊(あそ)びて閑適(かんてき)の懐(おもい)を暢(の)ぶるもよし

一、 武道競技にいそしみて身心を練るは最もよし之によりて協同事に当るの慣習を得るは更に望ましし

一、 理想を同じうせば我も人も表裏の一体なり養和の精神に生きて共に奉公の大義に進むべし

（出典：三菱養和会 HP）

大正12年7月30日　染井コート
第1回HIカップ戦、第8回関東関西戦

三菱庭球の歩み

―三菱庭球同好会と三菱養和会との関係史―